

第6次山ノ内町総合計画後期基本計画策定に係る住民説明会 顛末

開催日・出席者等

開催日時 令和7年10月17日（金） 18:30～20:00
場 所 山ノ内町文化センター
参 加 者 10名

内 容

第1章（観光・産業・雇用）に関する意見交換

参加者	アンケート結果で若者の定住を妨げる要因として「仕事が少ない」とあるが、若者が具体的にどのような仕事に就きたいか、あるいは何がないから仕事が少ないと感じているのか、そのリサーチは取れているか。観光業や農業といった主要産業では人手不足の実情があるため、働く場所は十分にあるはずであり、それ以外の仕事の方が求められているのかどうかを知りたい。
事務局	実際には、そこまで詳細な部分の回答はなかった。しかし、若者が山ノ内町の主要産業（観光や農業）に就きたくないのではないかという推測はある。現在、雇用対策は非常に苦労している。町から大学などで出て行った若い人たちが帰ってこない割合が非常に高い。これは、仕事はあるものの、若者たちがもっと別の仕事の選択肢を求めているからだろうという概括的な認識を持っている。
参加者	将来、ウェディングプランナーという仕事に就きたいため、専門学校に通っている。また別の参加者からは、医療系の仕事に就きたいといった意見が出た。
事務局	山ノ内町の観光などを目指す人は一部に限られてしまうのではないかという認識を示した。

第3章（学校教育・スポーツ活動）に関する意見交換

参加者	スポーツ活動の指標（参加者数を3018人から3100人に増加させる目標）について、過去に少年野球チームが親の負担などからなくなってしまった事例もあり、目標達成は非常に大変ではないか。指導者確保も難しい中、親の負担も大きく、選択と集中で集中する分野に力を入れるべきではないか。
事務局	現在、中学校の部活動の地域移行が進んでおり、町としても「総合型スポーツクラブ」を立ち上げ、運用を始めている。ここでは外部指導者が指導を行う仕組みを作っており、親や学校の先生が担えない部分をフォローすることを目指している。これは、町全体でスポーツに親しむ環境を作り、国民健康保険などの医療費削減にもつながることを期待している。親同士のつながりなど、活動のメリットは理解しているが、親が関わることを嫌がる現実もあるため、そうならない仕組みづくりに力を入れていく必要がある。指導者側としても、最終的に子どもがやりたくても親の送迎や支援がなけ

	ればできないという課題は承知しており、今後の5年間で検討していく。
--	-----------------------------------

全体的な計画の方向性に関する意見交換

参加者	総合計画の中で、今後の5年間で特にどこに重点を置くのか（観光、産業、福祉など）。すべて均等に平均的に行うのか、それとも達成すべき重要目標を集中して行うのか。均等にやるのであれば、従来の延長になってしまうのではないかという懸念がある。
事務局	総合計画は、山ノ内町を5年後、10年後、20年後に維持すること、すなわち人口をある程度のところで維持することを目標に策定している。現状のままでは45年後には人口が3000人程度になると言われているが、目標としては約6000人まで抑えたい。そのため、政策としては、「人口を減らさないための政策」と「人口が減っても維持できるための効率化」の2つを目的としている。この計画書は、各部署の全政策を平らに反映し、今後策定する総合戦略に具体的な事業や重点的な施策を載せる形になる。
参加者	山ノ内町に新たな産業（例：半導体の工場など）を持ってくるのは無理があるのではないかと。それよりも、長野市や飯山市などへの通勤が可能になっている現状を踏まえ、山ノ内町は観光や自然環境（綺麗な景色、川の整備）といった強みを充実させるべき。環境が良くなれば人々が集まってくるのではないかと。お金を投資すべきは、山ノ内町で「できること」に集中すべき。
事務局	新たな移住者からは、町の景色が非常に綺麗であることや、道端のリンゴ（当事者には当たり前の風景）などが素晴らしいと評価されている。この意見（町の自然環境への投資）は非常に大事なことで受け止め、計画に反映させていきたい。河川敷の整備など、荒れた川を綺麗にすることで、「綺麗な町だ」と感じさせることが重要である。最近のユネスコエコパーク指定は、志賀高原や山ノ内町の住民が長年やってきた「自然を守って使う」という取り組みが評価されたものであり、川や水といったストーリーは計画の展開でも重要になってくる。
参加者	都会へ行って帰ってくると、山ノ内町は「空気が良い」と感じるが、空気汚染などは避けるべき。山ノ内町にしかないものが欲しい。また、若者の定住を考えた際、仕事がないことよりも、「病院や個人医院が欲しい」といった医療体制の不足や生活のしづらさが、むしろ定住を妨げる要因になっているのではないかと。病院まで中野市まで行かなければならない現状があり、生活圏の近くに医療施設があれば安心できる。
事務局	病院やスーパーなど、生活していくうえですぐ近くにあった方が暮らしやすいという点は、重要な課題として認識している。
参加者	40年前の自身の経験と比べ、現代は子育て支援が恵まれている。しかし、現在、移住者や外国人が増えている一方で、地域住民との交流がないのが現実である。自治会への加入を拒む人がいるなど、地域コミュニティへ入ることへの意識が変わってきている。移住者と地元住民がうまく交流し、協働できる仕組みを町で考えていくべき。
事務局	町は、未来創造課内に移住・国際交流の担当を置き、移住希望者に対して区長さんとのつなぎ役を担い、自治会への加入を促すなどの支援を行っている。しかし、海外の方も増えており、地域コミュニティ形成における新しい課題が出てきている。これは

	多様化の時代において、非常に大きな課題であり、解決策を盛り込んでいかなければならない。
参加者	移住者、特に若者や海外の方のコミュニティへの「馴染ませ方」が最も難しい課題である。彼らが安心して定住できるよう、結婚・出産・子育てといった場面で、課をまたがってうまく連携し、行政によるフォローを行うべきではないか。
事務局	若者ミライ会議で外国籍の参加者からの意見聴取を行った結果、地域住民と外国籍の方とのコミュニケーションが非常に問題であることが分かった。現在、町社会福祉協議会と連携し、単なる日本語教室ではなく、観光業、農業など町の産業に即したより高度な日本語教育を計画中であり、今年度中に開始する予定である。これは複数の課を横断的に連携させて進める方針である。
参加者	山ノ内町と地獄谷野猿公苑のスノーモンキーが結びついていない。スノーモンキーが山ノ内町にあるということを、どうすればうまく発信できるか。オーストラリア人などは白馬の隣にスノーモンキーがあると思っている人もいる。
事務局	海外営業でもスノーモンキーの知名度は高いが、志賀高原の知名度は低いという現状がある。志賀高原、湯田中、渋温泉といった観光地間の戦略が統一されてなく、スノーモンキータウンとして売り出すことも一つだが、町のみでなく、観光事業者（関係当事者）がどう考えるかという点で戦略を練るのが大事である。
参加者	これから策定される戦略は、住民の期待に応えるような大胆な戦略となることを期待していいか。
事務局	戦略が大胆かどうかは、受け取り方次第である。町が出すというよりも、地域住民が与えてくれた課題から、その課題解決のための計画となっていく。その解決のために何をするかという部分に対する評価は住民の判断になる。
参加者	45 年後に人口が 3,500~6,000 人になるという試算がある中、その人数を維持するためには、施設維持などで中野市など近隣の市町村と協力していく関係を築いていかなければならないと思うが、その連携はどの程度進んでいるのか。
事務局	近隣自治体との連携については、これからであるが、すでにゴミ処理など、効率化のために複数町村で連携しながら取り組まれている。長野県全体の課題として、「人口減少スピードの緩和」と「人口が減っても自治体が生き残れるよう体制を整える」ことが求められており、近隣市町村が広域で効率化を進める必要がある。